

幼児をもつ母親の生活満足度と ソーシャル・サポートの関連性について

山村 文

Relation between Life Satisfaction of Mother
Who Bring up Infant and Social Support.

YAMAMURA, Aya

Abstract

The purpose of this study was to investigate the relation between life satisfaction of mothers who bring up infant and social support. This study investigated it with an original diagram as mother support model, was based on study therefore. The subject in this study was 16 mothers with under 50 months old children. The results showed 1] mother's life satisfaction was almost low, and they felt they have no time and economical room to spare both. 2] There was relationship between mother's life satisfaction and child-rearing anxiety, father's childcare satisfaction, and childcare support. These results indicated mothers needed childcare supports, especially they needed support from fathers. Therefore the original model appropriated for mother support model.

I 問題と目的

現在の日本では、「少子化」が進む一方で、家族の形態、機能も離婚やシングルマザーの増加により変化している。社会的状況は変化し、地域の間人間関係が希薄化し、核家族化が進行した。

子育ての現場においては、「子育ての孤立化」、「母子カプセル化」ともいうべき状況が広がっている（蒲原，2001）。これに対して私は、昔のような大家族の中で子どもを育てるといいう地域社会には戻れないが、それに変わる育児をする人、母親をサポートするしくみをつくる必要があると考える。

男性の性別役割分業や家事生活への意識面では変化はみられている。しかし、実際の行動面が伴っておらず、家事、育児のほとんどを母親が行っているのが現状である。現在、新エン

ゼルプランなどにより子育て環境の整備が進められているが、決して十分ではなく、行政面、経済面でも課題は多く残されており、市町村、地域レベルでの育児支援は始まったばかりであるというのが現状である。

母親の生活満足度に関する先行研究では、津田・菊池（2000）は、幼児をもつ有職女性の生活満足感には、夫のサポートと夫以外に自分の話を聞いてくれる人の多さが関連していると指摘し、小塚・大平（1999）が、母親の生活感情が肯定的であるかには、夫との関係、夫の育児参加への満足感、自分の外出機会が十分であるかが影響していると示している。また、永久（1995）は、生活感情は専業主婦の群の方が有職主婦群よりもやや否定的な生活感情であることがわかった。

さらに、柏木・若松（1994）は、育児に携わる母親たちは、必ずしも育児のあらゆる面を負担だと感じているのではなく、子どもや育児に対する肯定的側面と制約感やストレスという側面と併せ持つ葛藤状態であるとした。加藤（1998）の育児による制約が少なく、生活に張りを感じ、満足していることを「母親の育児生活に対する満足度」とした調査では、育児支援が多いほど、父親の家庭で過ごす時間が長いほど母親の満足度は高くなると指摘した。そうして、母親の満足度には、子どもの行動要因よりも人間関係などのソーシャル・サポートに影響されると指摘している。

育児不安については多く研究されているが、心理学における育児不安とは、育児を通して感じる具体的な心配事として捉える場合と育児に関して感じる疲労感、不安などのストレスとして捉える場合があり、その定義や呼び方は研究者により異なる（吉田他、1999）。牧野（1982）は、父親の子育ての責任感をもっていないと感じる母親は孤独感や圧迫感をもち、情緒的に不安定な状態で育児をするため、育児不安が高いと指摘した。

そこで、夫だけでなく、夫以外のソーシャル・サポートや支援の数や内容が生活満足度や育児ストレスに対して、どのように影響しているのかを検討することは、母子関係の向上というだけでなく、母親が真に必要とし、また、必要とされる育児支援体制づくりと子育て環境の整備を進める上で意義があると思われる。

以上のことより、先行研究からも育児支援の重要性が浮かび上がってくる。先行研究の多くは、母親の育児支援の内容を「ソーシャル・サポート」として測定していることが多い。本来、ソーシャル・サポートとは、社会生活を営むための人間のニーズに沿うようなフォーマルあるいはインフォーマルな活動との関係とされている。ソーシャル・サポートでは、一般的に情緒サポート、道具的サポート、情動的サポート、評価的サポートの4種類が指摘されている（House, 1981）。その中でも、母親の育児不安に関しては、第1の情緒的サポートと第2の道具的サポートが重要である（芳賀、2001）とされている。本研究では、父親のソーシャル・サポートの内容は芳賀（2001）を参考に道具的サポート（実体的）、情緒的サポートの二つに絞り、調査を行なうこととする。

モデル 図

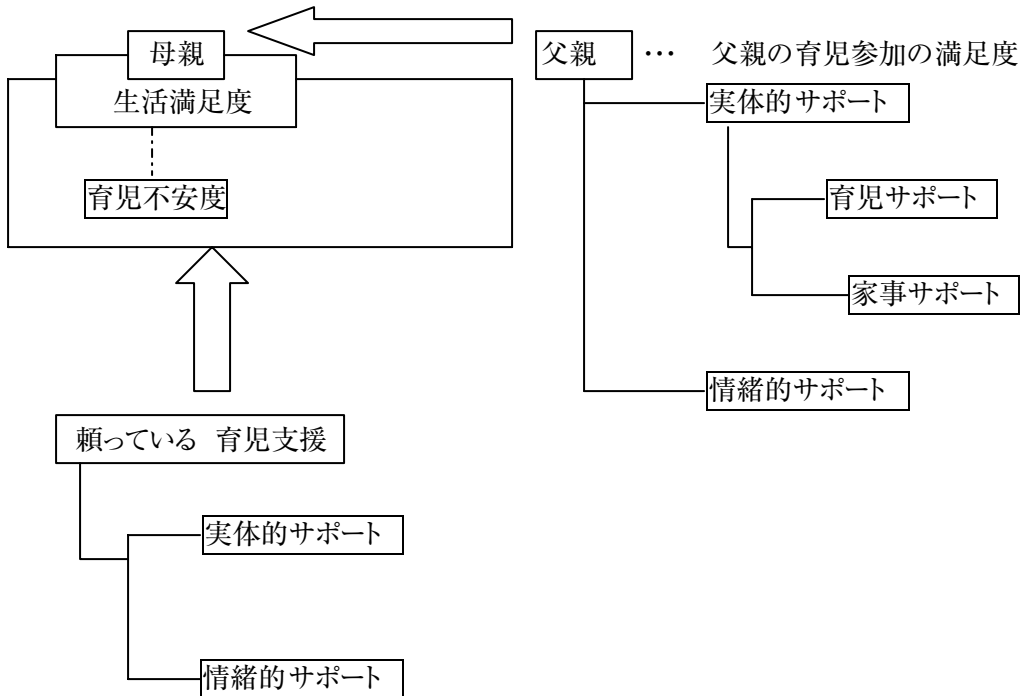


図1 母親の生活満足度サポート図

生活満足度は、育児に対してのみではなく、母親の生活全般における満足度であり、母親が生活の中での張りや充実感を感じることで満足度が生じると考えられる。また、母親の生活満足度は母親自身のみで充足されるものではなく、母親自身とその他のサポートにより形成され则认为る。そこで、夫以外の育児支援の数や内容がサービスを利用する母親の生活満足度や育児不安に対して、どのように影響しているのかを調査、検討することは、母親の精神の安定や母子関係の向上というだけでなく、母親に必要なとされる育児支援体制づくりと子育て環境の整備を進める上で意義があると思われる。

本研究では、現在、幼児をもつ母親たちが生活全般に対して抱いている生活満足度と母親が頼っているソーシャル・サポートがどのように関連しているのかを検討することを目的とする。この目的達成のため、先行研究を参考に検討したいモデル図を作成した（図1）。モデル図は、母親の生活満足度サポートモデルである。本研究では、このモデル図に沿い、母親の生活満足感と各サポート項目の状況を把握し、生活満足度との関係をみていくこととする。

尚、育児をする母親を対象とした本研究において用いるソーシャル・サポートとは、最も身近な育児の支援者の父親に限定し、本論では扱っていく。家庭外のソーシャル・サポートにつ

いては、すべて育児支援として扱っていくことにする。また、具体的な検討を行なうため、質問紙と半構造化面接を行なうこととする。

Ⅱ 方法

調査対象者

調査対象者は、神奈川県在住で1歳6ヶ月から4歳2ヶ月の幼児をもつ母親16名を対象とした。

母親の年齢の平均年齢は33歳（SD = 3.1）、父親の年齢は平均年齢は34.1歳（SD = 3.4）、子どもの平均人数は2人（SD = 0.73）であった。詳細については、以下の表1に記す。

表1 対象者の属性

事項	年齢	人数	%	n = 16	
母親の年齢	25～29歳	2	12.5%	平均	33歳
	30～34歳	8	50%	SD	3.14
	35～39歳	6	37.5%	Range	26～37歳
父親の年齢	25～29歳	2	12.5%	平均	34.1歳
	30～34歳	6	37.5%	SD	3.46
	35～39歳	8	50%	Range	28～39歳
子どもの人数	1人	4	25%	平均	2人
	2人	8	50%	SD	0.73
	3人	4	25%		
末子の年齢	1歳（1:6）	1	6.3%		
	2歳（2:0～2:11）	5	31.3%		
	3歳（3:0～3:11）	9	56.3%		
	4歳（4:2）	1	6.3%		
家族構成	核家族	13	81.3%	平均	4.4人
	複合家族	3	18.8%	SD	1.31
夫の職業	会社員	15	93.8%		
	自営業	1	6.3%		
母親の職業	専業主婦	12	75.0%		
	常勤	1	6.3%		
	パート	3	18.8%		
面接時間	30～59分	9	56.3%	平均	58分
	60～89分	5	31.3%	SD	16.1
	90～120分	2	12.5%		
父親の帰宅時間	17:00～18:59	2	12.5%		
	19:00～20:59	3	18.7%		
	21:00～22:59	6	37.5%		
	それ以降	5	31.2%		

調査方法

調査方法は、調査対象者に対し、質問紙と半構造化面接を実施した。依頼手続きとしては、文書・口頭で説明を行い、協力を募った。調査協力者には、調査票の入った封筒を母親に手渡

しし、面接時に回収した。調査実施時期は2003年9月から10月に行い、配布から回収までの期間は2週間前後であった。質問紙の回答に不備のあった場合は、面接時にその場で修正してもらったため、有効回収率は100%であった。

質問紙

質問紙は、生活満足度項目、育児不安項目、父親の育児サポート・家事サポート項目、現在得られている育児支援の内容と利用度、フェイスシートからなる。

生活満足度項目は加藤（1998）の自己の生活全般に対する肯定的感情を生活満足とした4項目（逆転項目1項目）を用いた。得点は4件法（「よくあてはまる」、「ややあてはまる」、「ややあてはまらない」、「まったくあてはまらない」）で、4点から1点に得点化した（逆転項目については得点修正）。得点が高いほど生活満足が高いことを示す。

育児不安項目については加藤（2002）、川井ら（2000）を参考に作成し、19項目からなる（逆転項目3項目）。回答方法は、「よくある」、「ときどきある」、「あまりない」、「まったくない」の4件法で回答、4点から1点に得点化した（逆転項目については得点修正）、得点が高いほど、不安が高いことを示す。

父親のソーシャル・サポート項目は、実体的サポートと情緒的サポートに区別して調査した。実体的サポートは、〈育児サポート6項目〉、〈家事サポート4項目〉の計10項目、情緒的サポートは、3項目である。最後に、父親の育児サポートを母親がどのくらい満足しているかという〈父親育児参加に対する満足度〉1項目を加えた。評価方法は、「よくする」、「ときどきする」、「ほとんどしない」、「まったくしない」の4件法で、母親が認識しているその頻度を問い、サポート度の高い順に4点から1点と得点化した。

家庭外の育児支援として、用途別に頼る育児支援をあげてもらった。内容は、実体的サポートである「用事のあるとき」、「気分転換をしたいとき」、「病気のとき」にそれぞれ頼っている人、機関を全てあげてもらい、また、情緒的サポートとして「悩みがあるとき」に相談する人、機関をすべてあげてもらった。

フェイスシートでは、母親の年齢、父親の年齢、子どもの人数、末子の年齢、家族形態、母親の職業、父親の職業、父親の帰宅時間を記入してもらった。

半構造化面接

質問紙を回収後の半構造化面接では、回収された質問紙をもとに対象者と面接を行い、「今の生活の中で不満に思うことはどんなことか」「今後望む育児支援とは」、など質問紙だけではわからないことを詳しく聞き取り調査を行った。

Ⅲ 結果

生活満足度

今回の調査では、対象者数が少数のため、量的分析には限界がある。そこで、まず、回答傾向を質的に捉える試みとして、質問毎に4件の回答割合と平均値を図2に示した。

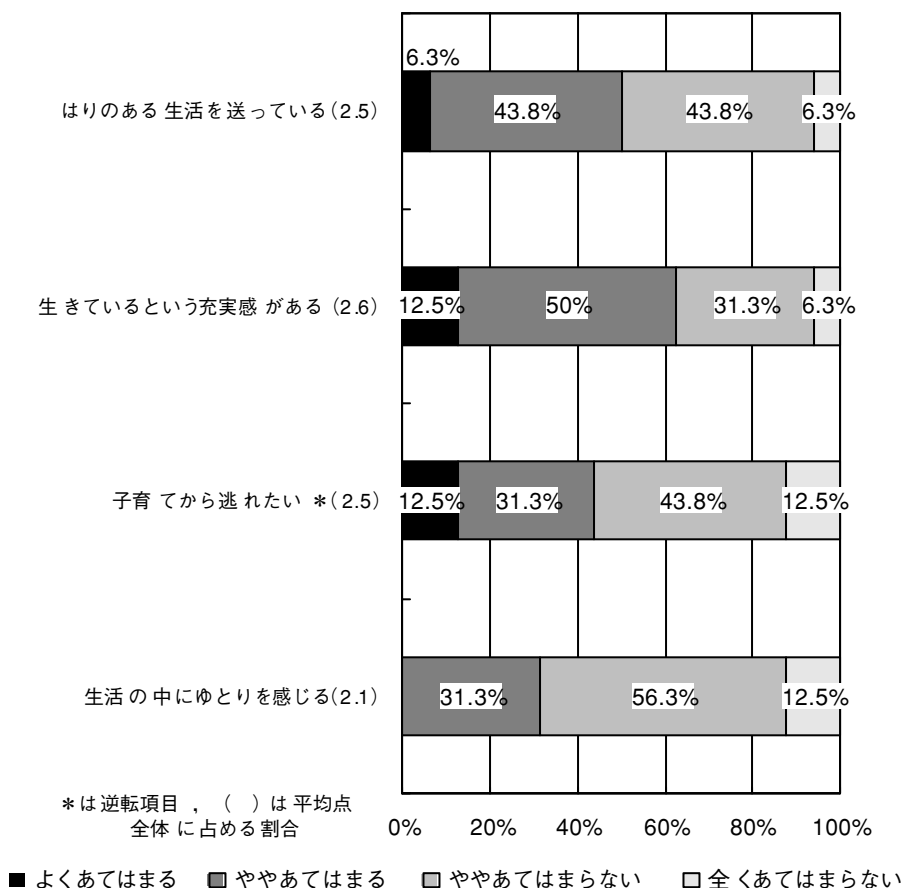


図2 生活満足度項目別分布

表2 各測定項目別の得点：()内はSD

	生活満足度	育児不安	育児サポート	家事サポート	情緒サポート	育児参加満足度
得点範囲	4-16	19-76	6-24	6-24	3-12	1-4
平均点	9.9 (2.2)	46.5 (7.5)	17.6 (3.2)	6.7 (2.2)	8.5 (1.3)	2.6 (0.9)
最小値	5	32	14	4	5	1
最大値	14	61	24	12	11	4
α 係数	0.67	0.865	0.71	0.72	0.62	0.67

生活満足度は1～4点、4項目であり、16点満点である。得点が高いほど生活満足度が高くなるよう設定した。4項目全体の平均は9.9点（SD=2.2）、最小得点は5点、最大得点は14点であった（表2）。

図2からみていくと、40％程度の母親が半分以上の項目で否定的な回答をしているということになり、生活に満足している度合いが低いことが窺える。また、母親は充実感以外の項目では、生活に張りを感じていないこと、さらに、ゆとりに至っては3分2以上の母親が感じてな

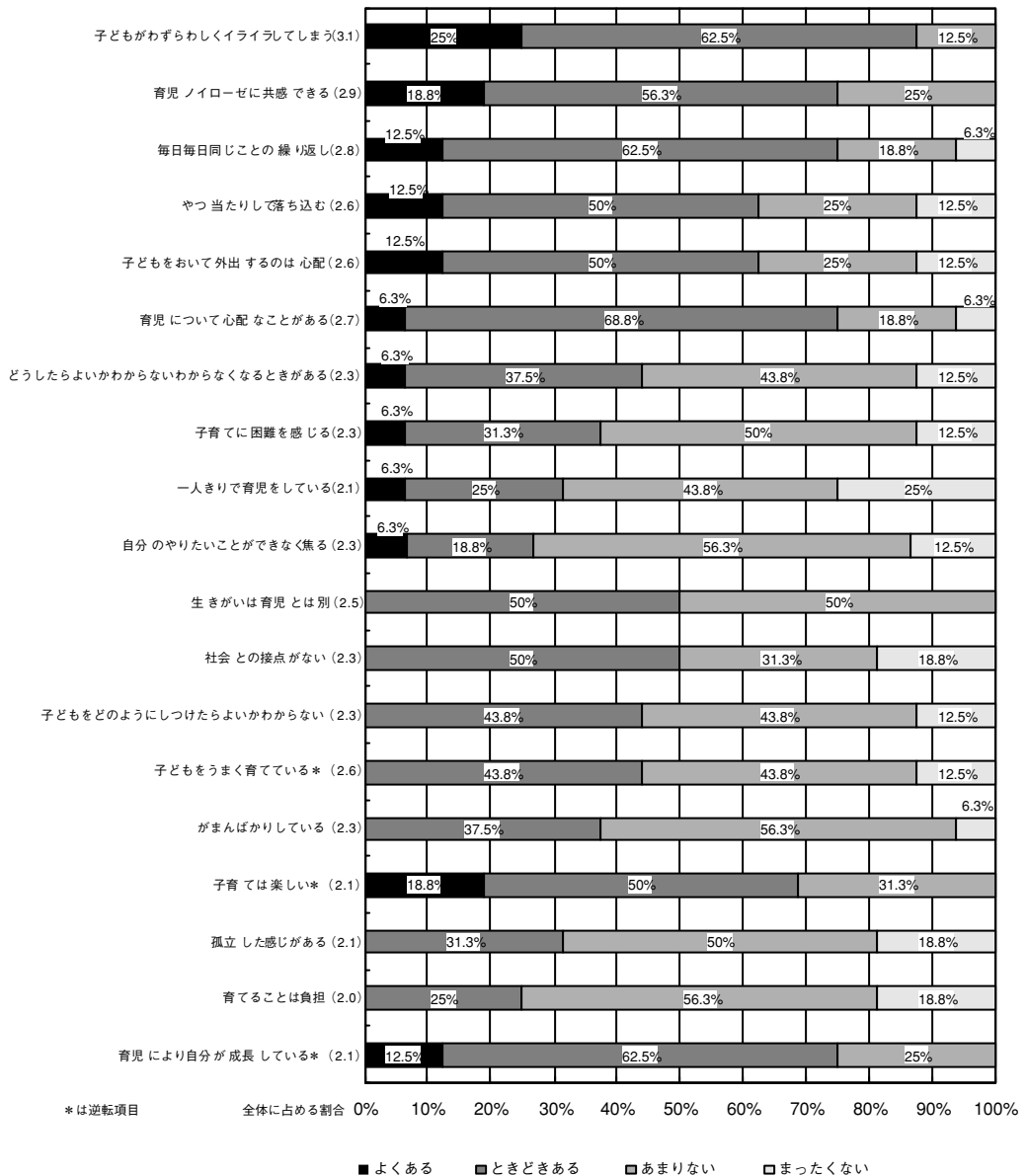


図3 育児不安項目別分布

いと回答しているなど全体的に生活満足度が低い状態であることが窺える。特に、最小得点者（5点）にいたっては、生活満足度はかなり低い状態であることが考えられる。

得点分布は、8点から12点の4点というの狭い範囲に内に集中しており、満足度は2極化しているわけではなく、どの層にも該当者がいた。

母親からは、「充実感を感じることはあるが、ゆとりはない」、「張りを感じるようなことはない」という意見がきかれた。

育児不安度

育児不安項目は、19項目あり（逆転項目は3項目、得点修正後加算）、各4件法、計76点満点、最小獲得得点は19点である。平均点は46.5点（SD=7.5）であった（表2）。

最も平均得点が高かった項目は、〈こどもがわずらわしくイライラしてしまう〉で平均3.1点（SD=0.6）であり、「まったくない」にあてはまった母親はいなかった（図3）。「よくある」、「ときどきある」の両方をあわせると14人とほとんどの母親が子育てにおいて、〈イライラすること〉が「ある」と答えた。それに続き、〈育児ノイローゼに共感できる〉、〈毎日毎日、同じことの繰り返ししかしていないと思う〉が高い得点を記していた。以上のように、「よくある」、「ときどきある」（以下「ある」とする）の回答割合の多い項目に注目してみると、育児負担や育児困難を示すものであった。しかし、〈子どもを育てることは負担である〉という育児自体が負担であるという否定的な方向には捉えていなかった。

次に、肯定的な項目である〈育児により自分が成長している〉（逆転項目）、〈子育ては楽しい〉（逆転項目）においては約70%の母親が肯定的に捉えていた。

以上のことより、育児不安項目では、負担や困難を示す具体的な項目においては、「ある」の率は高くなっている。しかし、育児に対して肯定的な項目についても母親は肯定的な回答をしており、母親の中には両方の感情があると考えられ、柏木・若松（1994）と同様の傾向があると考えられる。さらには、母親は母親であるだけでなく、〈自分の生きがいは育児とは別〉という回答の割合からは、社会への目の向け方は個人の考え方によるところが大きく、半分に分かれるようであった。

父親のソーシャル・サポート

今回の調査では、父親のソーシャル・サポートを実体的サポートと情緒的サポートに分けて行った。まず実体的サポートは、育児サポート項目と家事サポート項目の2つに分けられる。

尚、本調査では、父親のソーシャル・サポートの内容に対しての頻度を「よくする」「まったくしない」という形できいている。そのため、週に行なう回数が少なくても「よくする」と答える母親もいると考えられ、母親の満足度も含まれると考え、考察していくこととする。

育児サポート得点は、6項目、24点満点で、4件法で採点した。平均点は、17.6点（SD=3.2）

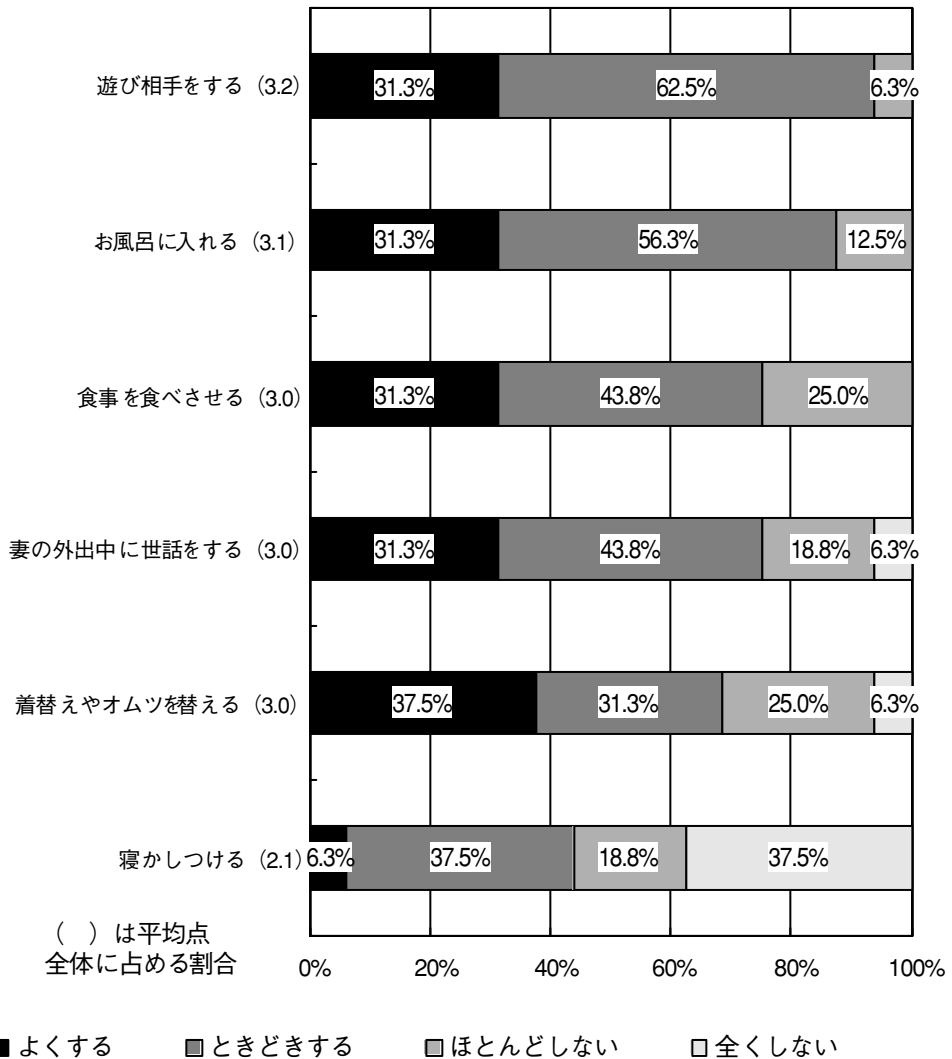


図4 育児参加度項目別分布

であった（表2，図4）。6項目はすべて父親が行なう育児サポートの頻度を問う項目である。

フェイスシートより父親の帰宅時間が20時を超える父親が12人（75%）もいることを考えると、〈子どもを寝かしつける〉ことは現実的に不可能な状態であり、この項目の点数が低いことも理解できる。しかし、同じように父親の帰宅時間の影響が出ると考えられる〈子どもの遊び相手をする〉、〈お風呂に入れる〉の2項目では、ともに「よくする」、「ときどきする」と合わせると80%を超えることから、日々の生活のなかで行なう頻度としては少ないが、休日に行なうことで母親たちは肯定的に捉えているの可能性が考えられる。それ以外の項目でも「よくする」、「ときどきする」と合わせると、ほとんどが70%以上であった。育児サポートに対して母親は、父親のサポートの頻度が低くても休日などに定期的に行なうことにより肯定的に

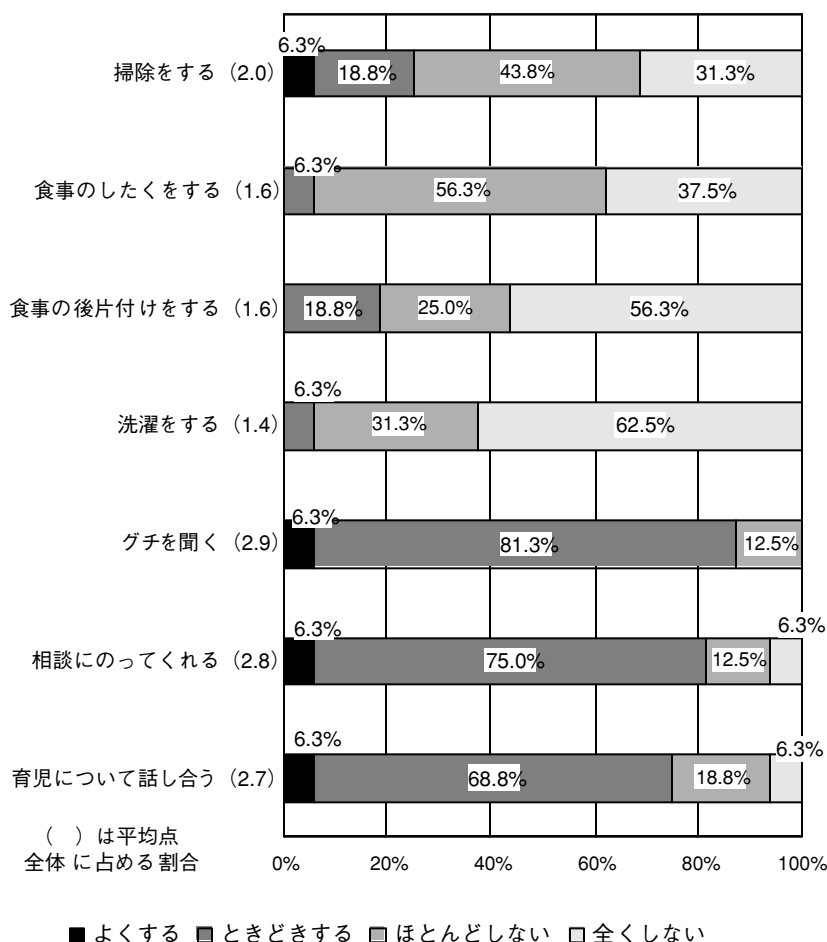


図5 家事サポート度と情緒的サポートの項目別分布

捉えている可能性がある。

もう1つの実体的サポートである家事サポート得点は、4項目、16点満点であるが、平均得点は6.7点 (SD=2.2) であった (表2, 図5)。合計点数の半分である8点以下の人数は13人 (78%) で、ほとんどの人が否定的な回答をしていた。以上のことより、家事サポートについては、ほとんどの項目においては、母親は、「まったくしない」、「ほとんどしない」と答えていた。

情緒的サポートの得点は、3項目、12点満点であるが、平均が8.5点となっている (表2, 図5)。8点以上が13人 (78%) となっており父親と話し合いがされていると考えられ、3項目の内どの項目も「よくする」「ときどきする」(以下「ある」とする) を合わせると75%以上に上っていた。特に、〈グチを聞く〉では、14人 (87.5%) の母親が「ある」と答えていたことから、グチを聞いてもらえる相手として、父親の存在が確認されたといえる。

〈グチをきいてくれる〉という母親からのある種、一方的であるやりとりの方が高く、〈相談にのってくれる〉、〈育児について話し合う〉という母親のこぼれ話を聞き、父親の意見が求められる2項目になるとサポート度は若干下がっていた。

さらに、〈父親の育児参加に満足している〉という父親の育児参加への母親の満足度を問う質問では、4点満点で、平均得点2.6点であった。育児参加満足度は予想外の低い結果となった。父親の育児サポートは回数は多くないことが考えられるが、育児サポートや情緒的サポートは行われていたはずである。これは、父親のソーシャル・サポートの量と内容について、半構造化面接で考察していくことが必要と考えられる。

頼っている育児支援

母親の育児支援の数と質を調査するため、用途別に頼る育児支援として、〈用事のあるとき〉、〈気分転換をしたいとき〉、〈病気のあるとき〉に頼る人・機関、〈悩みがあるとき〉相談する人・機関をすべて（父親を含む）あげてもらった（複数回答可）。

用事のあるときに子どもを預ける人・機関として選択肢数は、1から5と幅があり、平均値は2.8で、父親が13人（81.2%）と最も多く、ついで実父母となっており、親族を中心に支援者としている（表3）。

次に、気分転換をしたいときに子どもを預ける人・機関の項目では、選択肢数は0から4で、0は「あずけない」で回答数1だった。平均値は2と少なく、ここでも、用事のあるときと同様、

表3 頼っている育児支援（複数回答）

人数：()内は対象者16人に占める割合

	用事 (%)	気分転換 (%)	病気 (%)	悩み(%)
支援数の平均	2.8(SD=1.3)	2(SD=1.3)	2.3(SD=1.1)	3.5(SD=1)
あずける人がいない	0(0)	0(0)	1(6.3)	0(0)
あずけない	0(0)	1(6.3)	2(12.5)	0(0)
夫	13(81.3)	14(87.5)	11(68.8)	13(81.3)
実父母	9(56.3)	7(43.8)	10(62.5)	11(68.8)
義理の父母	7(43.8)	4(25)	6(37.5)	1(6.3)
自分のきょうだい	8(50)	5(31.3)	3(18.8)	7(43.8)
夫のきょうだい	1(6.3)	0(0)	1(6.3)	0(0)
その他の親戚	0(0)	0(0)	0(0)	1(6.3)
友人	3(18.8)	1(6.3)	1(6.3)	12(75)
隣人	4(25)	1(6.3)	2(12.5)	5(31.3)
園の一時保育	1(6.3)	0(0)	0(0)	0(0)
保健所等の公的機関	—	—	—	1(6.3)
幼稚園の先生	—	—	—	1(6.3)
育児サークル	—	—	—	4(25)

支援は父親が14人（87.5%）、ついで実父母、自分のきょうだい、義理の父母が上位にあがっていた。

病気のときに子どもを預ける人・機関は、選択数は、0から5であり、「あずけない」、「あずける人がいない」と回答した人がそれぞれ1人ずついた。平均値は2.3、父親が11人（68.7%）、ついで実父母が10人（62.5%）と実父母は他の用途よりも多くなっていた。

悩みがあるときに相談する人・機関では、選択肢数の平均値は3.5と前の項目よりやや多くなっている。支援者としては、父親13人（81.2%）、友人、実父母、自分のきょうだいとなっており、初めて友人が上位になり、それ以外ではやはり、親族中心に頼っていた。

次に、用途など関係なく、1人の母親が親族で育児について頼れる人数を尋ねた結果は平均値が3.5人となっていた。同様に、1人の母親が友人で育児について頼れる人数では、平均値は3.1人（SD=2.7）であった。分布としては、頼れる友人がいないから2人までで9人（56.2%）を占めており、育児について頼れるとなると人数が限られていることが窺える。以上のことから、用途別にみた母親が頼っている育児支援としては、多くの母親がまず、第一に父親に頼っており、サポートを期待する重要な実体的にも情緒的にも支えとしているということがいえた。次いで実父母、自分のきょうだいに頼っており、友人や隣人は少なく、育児支援の多くが親族に頼っている生活が窺える。

測定尺度間の相関

1) 質問項目の検討

本研究でのモデル図に沿って、生活満足度との関係性を明らかにしていきたい。先述しているとおり、調査対象者が16名と少数のため、量的分析に限界があると思われる。尺度の有効性を見出すため、母親の生活満足、育児不安度、父親の育児サポート度、家事サポート度、情緒サポート度、育児参加満足度の信頼性係数（以下 α 係数）を割り出したところ、若干低い値もみられたが、半数以上で高い結果が得られた。対象者数の少なさから今回は採用し、それぞれのサポート項目の合計得点を各尺度として、以後の分析に使用することとする（表2）。

2) 相関の検討

これまで集計してきた各尺度の関係をここではモデル図に沿いみていくことにする（図6）。ただし、家事サポートについては、今回の分析からは除くこととした。

まず、生活満足度は、育児不安と $p < 0.01$ で負の相関があり、夫の育児参加満足度は育児サポート度と正の有意な相関（ $p < 0.01$ ）がみられた（表5）。また、母親の生活満足度と育児サポート度、父親の育児参加満足度と $p < 0.1$ で正の相関がみられたことにより、情緒的サポートよりも実体的なサポートである育児サポートの方が影響すると考えられる。

母親の生活満足度は、情緒的サポートではなく、育児サポートとの関係があり、実体が伴うことで満足度を変化させることができるとと思われる。情緒的サポートは、母親の生活満足度や

育児不安度 育児サポート度

モデル図

The diagram illustrates a conceptual model of factors influencing maternal life satisfaction. At the top left, a box labeled "母親生活満足度" (Mother's Life Satisfaction) contains two rounded rectangles. The upper one describes a positive state: "日ごほりのある生活を送っている 日々の子育ての中で生きている という充実感がある 子育てから逃げたいと思う 生活の中にゆとりを感じる". The lower one lists negative states: "充実感", "育児負担感", and "育児困難感". An upward arrow labeled "**" connects these two boxes. To the right, a box labeled "父親の育児参加満足度" (Father's Child Participation Satisfaction) has an arrow pointing to the mother's life satisfaction box, labeled with a dagger symbol (†). Below this, a box labeled "育児" (Parenting) also points to the same box with a dagger symbol (†). From the "育児" box, six arrows point to specific tasks: "子どもの遊び相手をする", "子どもの着替えやオムツを替える", "子どもに食事を食べさせる", "子どもをお風呂に入れる", "子どもを寝かしつける", and "子どもの世話をする". Below the parenting box are two more boxes: "家事" (Housework) and "情緒的サポート" (Emotional Support). Arrows from both point to the mother's life satisfaction box, labeled "NS". The "家事" box lists four tasks: "食事の支度ををする", "食事の後片付けをする", "掃除をする", and "洗濯をする". The "情緒的サポート" box lists three types of support: "グチをきいてくれる", "相談にのってくれる", and "育児に関する話を話し合う". At the bottom, a box labeled "頼っている育児支援" (Childcare Support Relied Upon) has two arrows pointing up to the mother's life satisfaction box. One is labeled "実体的サポート" (Tangible Support) and the other "情緒的サポート" (Emotional Support). These lead to detailed lists of support sources and situations. A legend at the bottom right defines the significance levels: ** p<0.01, * p<0.05, † p<0.1.

母親生活満足度

父親の育児参加満足度

育児

家事

情緒的サポート

頼っている育児支援

実体的サポート

情緒的サポート

**

*

†

NS

NS

充実感
育児負担感
育児困難感

日ごほりのある生活を送っている
日々の子育ての中で生きている
という充実感がある
子育てから逃げたいと思う
生活の中にゆとりを感じる

子どもの遊び相手をする
子どもの着替えやオムツを替える
子どもに食事を食べさせる
子どもをお風呂に入れる
子どもを寝かしつける
子どもの世話をする

食事の支度ををする
食事の後片付けをする
掃除をする
洗濯をする

グチをきいてくれる
相談にのってくれる
育児に関する話を話し合う

用事があるとき・・・父親・実父母・自分のきょうだい・父親の実父母・
父親のきょうだい・友人・隣人・一時保育
気分転換をしたいとき・・・父親・実父母・自分のきょうだい・父親の実父母
病気になったとき・・・父親・実父母・自分のきょうだい・父親の実父母・
父親のきょうだい・友人・隣人
悩みを相談したいとき
父親・実父母・自分のきょうだい・父親の実父母・その他の親戚・友人・隣人・
幼稚園の先生・育児サークル

** p<0.01
* p<0.05
† p<0.1

85

父親の育児参加満足度との関係はみられなかった。しかし、母親の育児不安と負の相関 ($p < 0.05$) でみられ、育児不安を緩衝する可能性が考えられる。

以上のことより、母親の生活満足度には、父親の育児満足度や育児サポート度、頼っている支援数が多いことなどが影響しており、母親の生活満足度は、育児に関する要因だけではなく、様々な要因が複雑に絡み合い、規定していると考えられる。

半構造化面接

半構造化面接では、具体的に母親に口頭で答えてもらった。

1) 生活への不満

生活への不満として多くの母親が口にしたのは、「自分の時間がない」で11人（68%）であった（表6）。母親の中には、「時間がない」と回答しながらも、自分で時間を作り出し、自分の趣味や読書などの時間にあてて楽しむ母親も5人ほどいた。次いで「経済的に苦しい」が5人（31%）であった。また、「父親に自分の気持ちをわかってもらいたい」と父親との関係について話す人もいた。これは、母親1人で育児を行なっているが故に、制約感を表す「自分の時間がない」という結果が出たと考えられる。

表6 生活への不満

生活への不満	人数（16人中の割合）
自分の時間がない	11（68.7%）
（苦にならない）	4
経済的に苦しい	5（31.2%）
父親との関係	1（6.2%）
友人関係	1（6.2%）
特になし	3（18.7%）

さらに、「経済的に苦しい」が続いており、時間的、経済的な制約感を表すものになっており、限られた中で生活しているという母親の生活を窺うことができる。

また、「時間がない」、「経済的に苦しい」が不満としてあげられたことは、生活満足度の「生活にゆとりを感じない」と約70%の母親が回答していたように、時間的、経済的に余裕がないことが、ゆとりを感じないことに影響していると考えられる。

2) 父親に対する不満

父親に対する不満では、〈子どもに関すること〉が上位にきていた（表7）。不満の多くは〈子どもに関すること〉に集中していたが、その他に「昇給」という〈経済的サポート〉と「帰宅時間を早める」、「自分の気持ちをわかってほしい」〈情緒的サポート〉に分けられるよう

である。

表7 父親への不満

	人数 (%)
もっと子どもと遊んでほしい	6 (37.5)
子どもの面倒をみてほしい	4 (25)
子どもとのかかわり方	4 (25)
昇給	3 (18.7)
みんなで外出する	3 (18.7)
帰宅時間を早める	1 (6.2)
気持ちをわかってほしい	1 (6.2)
特になし	3 (18.7)

子どもとの密接に関わることを望む母親が多かったが、その関わり方にも母親は不満を抱いていた。叱り方や叱るポイント、子どもとの遊び方など、接し方をもっと父親らしくしてほしいとの意見があった。また、面接において、休日に遊ぶこととして子どもを連れて外出する父親が多いようであったが、外出場所として母親からは、子どもも楽しめる場所に連れて行くことや子どもに主体のある遊び、体を使った遊びをしてほしいとの声が聞かれた。

以上のことより、父親への不満においては「もっと遊んでほしい」と回数の増加を求める回答が多かった。しかし、質問紙調査において「あそび相手をする」は「ある」の率が高かった項目である。それにも関わらず、不満としてあげられたということは、母親も肯定的には捉えているが、父親の育児サポートの内容としては満足していないということになる。それは、量的な問題として、現状の頻度と母親が期待する頻度とにズレがあり、上記のように不満としてあげられたと考えられる。

一方では、質的な問題として、父親の子どもとの遊び方やかかわり方について不満が出たように、母親たちが遊びの内容に満足していないとも考えられる。さらに、家事サポート度は父親への不満として家事サポート項目が1つもでてこなかったことより、父親の実体的サポートとしては家事サポートよりも育児サポートが強く期待されているといえる。

以上の結果より、「今後、父親の育児サポート・家事サポートを今以上に望みますか」との質問をしたところ、「育児サポートのみを望む」が10人 (62.5%)、「育児サポートと家事サポート両方を望む」1人 (6.2%)、「家事サポートのみ望む」は0人で、「どちらも望まない」が5人 (31%) であった。

家事サポートを望まない理由としては、母親側と父親側の双方の理由が挙げられた。母親側の理由としては、家事サポートは、父親にサポートをしてもらっても、母親側が満足しない、

母親が行った方が、スムーズでストレスが少ないとのことであった。一方、父親側の理由としては、「父親の仕事が忙しいため、家事サポートまでは期待できない。ならば、せめて育児サポートを充実させてもらいたい」という半分諦めの入った、妥協案がこの結果になっている。どちらのサポートも望まない理由としても、半数以上は「仕事が忙しく、現状を維持してくれればよい」という、サポートを望みながらも諦めざるをえない母親の状態がうかがえた。

3) 母親が望む家庭外の育児支援

母親たちが望む育児支援を「あるとよいと思う育児支援は」という形で質問をした（自由回答）。その結果は、表8のとおりである。

表8 母親が望む子育て支援（人数は16人中）

	人数	条件
子どもを預けるところ	7	いつでも、理由がなくても、低料金、短時間
育児について相談できるところ	3	常設、身近
児童手当、医療費の補助の増加	2	
子ども同士、親同士が過ごせる場所	2	
サークル講演会などの情報提供	2	

子どもを預ける場所としては、「短時間でも、理由がなくても、低料金で預かってくれるところがほしい」とのことであった。預けたいと思う時は、買い物や美容院、講演会などがあげられ、「買い物の間など、よい気分転換になる」、「講演会などは、（子どもを）預かってもらえるところがないと行きたくても諦めざるを得ない」、「病気の時に一緒にいなければならないのは、つらい」との意見がきかれた。短時間、母親の社会活動のために預かってもらいたいと希望する母親がほとんどであった。また、先述の結果でもでてきた、母親の経済的に余裕がない生活を表すように、児童手当や医療費補助の増加や預かる場所での低料金化を望む母親がいた。さらに、現在、一時保育の存在を知ってはいても、事前に手続きが必要で、料金が高く、時間が限られているなど、利用しやすいとはいえない状態であることが考えられ、利用者である母親の簡便性を求めるニーズと支援者側のニーズのミスマッチが窺えた。

IV 全体的考察

これより、質問紙と半構造化面接の両方を踏まえ、目的に沿い、モデル図（図7）をみながら考察を行う。

1) 生活満足度

本研究の結果、母親の生活満足度の度合いは全体的に低い状態であった。生活の中で生きて

モデル図

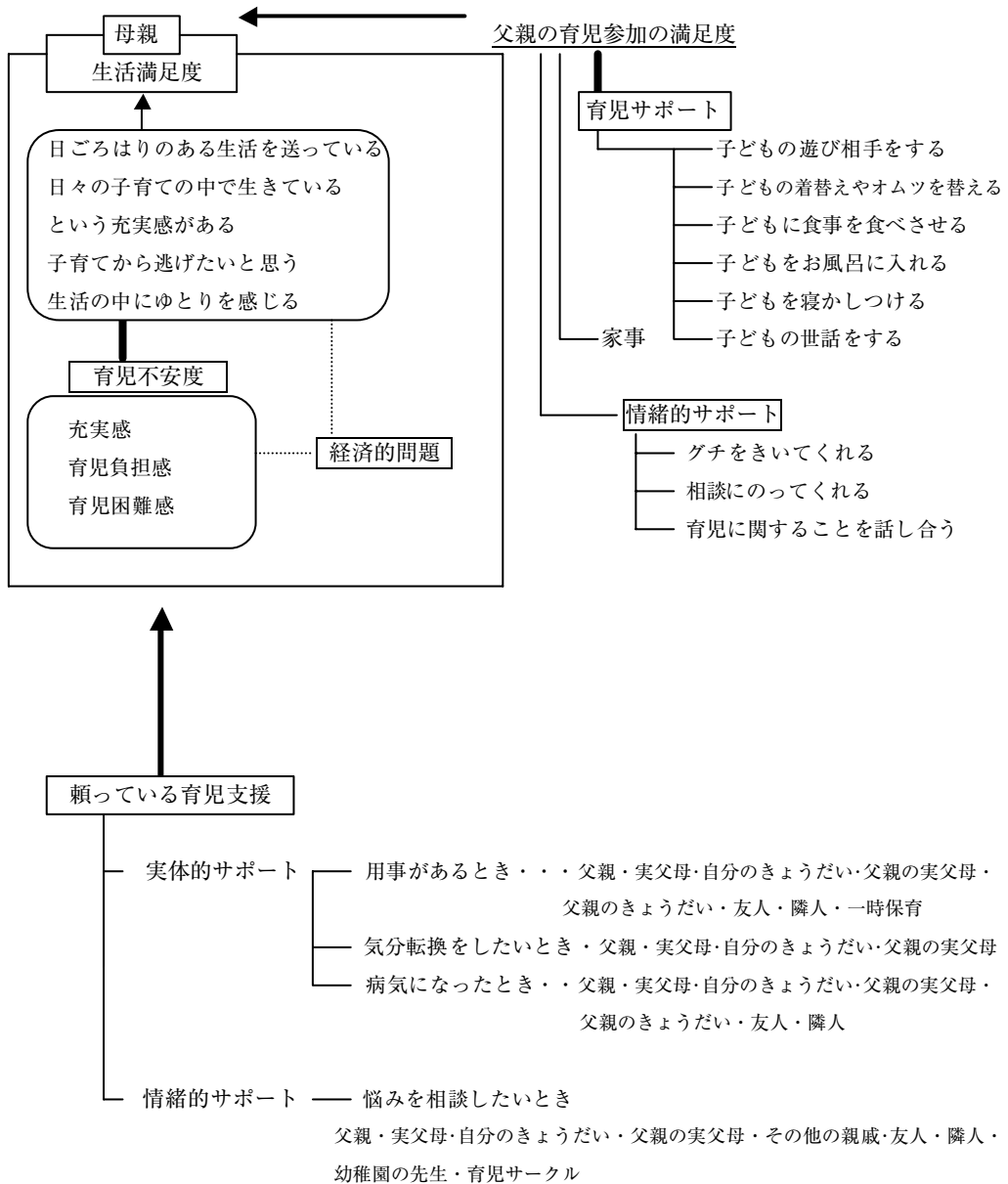


図7 母親の生活満足度サポートモデル図

いるという充実感は感じることはあっても、生活に張りやゆとりを感じることは少ないようであった。さらに、半構造化面接において、母親の現在の生活への不満が時間的、経済的な制約感に集中していたことから、母親にとってのゆとりとは時間的、経済的の両方をさしていると考えられる。これにより、生活の中での時間的、経済的余裕のなさが「ゆとりがない」と感じ

ることに関連していると考えられた。また、育児不安度との相関が示され、母親の生活満足度と育児不安とが関連していることが示された。

2) 父親のソーシャル・サポート

父親の育児サポート度は、全体的に高い結果であり、父親が子どもと関わっていることが窺えた。また、本研究では、実際に回数は少なくとも母親の捉え方次第で結果が変化する回答方法であり、母親の満足度が影響すると考えられる。父親の帰宅時間を考えると数多くできるものではない育児サポートでも、母親からの評価が高かったことは、休日などに育児サポートを行うことで母親たちは肯定的に捉えている可能性があると考えられる。半構造化面接より、母親からは育児サポートの中でも「子どもと遊ぶ」ことを量的にも質的にも求められていることが明らかになった。さらに、遊びは子どもに主体を置いた遊びをすること、叱るなど父親としての役割をすることを母親は期待していた。

家事サポートは、ほとんど父親は行なっていなかったが、家事サポートに対しては母親も望んではいない結果となった。それは、母親は父親の仕事が忙しいことは十分承知しており、家事サポートに対しても期待はあるがこれ以上は望めない状態であると感じ、諦めているからである。

相関関係から検討すると、育児サポートを行なうことで、父親の育児参加満足度だけでなく、母親の生活満足度にも弱いながらも影響を与えていた。これは、家事サポートよりも育児サポート望む母親の希望とも一致していることから、精神的にも安定し、父親の育児サポートへの捉え方、さらには、母親の生活満足度も向上すると考えられる。

以上のことより、実体的サポートとしては、父親は回数は少なくとも定期的に育児サポート、特に子どもと関わるものが求められていた。また、その内容も叱るなどの父親としての関わり方をしてほしいと語られており、サポートの量とともに質についても父親の配慮が必要となってくる。父親の帰宅時間があらかずように、父親のソーシャル・サポートを促進させるには、父親の意識の改革とともに労働時間の短縮などの職場環境の状況改善が重要な課題である。本研究において、情緒的サポートは高く、母親は精神的に支えられていると考えられる。しかし、情緒的サポート度は、母親の生活満足度との関係は見出せなかった。情緒的サポート度と育児不安、育児不安と母親の生活満足度の間で相関関係がみられたことから、情緒的サポートを充実させることで、育児不安が緩和されることにより、間接的に母親の生活満足度が上昇するという可能性も考えられるので、母親にとっては必要なサポートであると考えられる。

3) 母親が頼っている育児支援と望む支援

母親が現在頼っている育児支援は、どの用途でも第一選択肢は父親であり、その他も親族中心に頼っていることが明らかになった。特に預ける場合には、隣人や友人でなく、親族がほとんどであり、預けられない場合には、外出や用事を諦めるという制限された状況におかれていた。

今後、母親が望む子育て支援としては、「預けられる場所がほしい」が一番多く、これは現

在の親族中心に頼っている母親からすれば、当然の結果といえる。預けられる場所があることにより、母親は自分の時間を短時間でも持つことができ、子どもから離れ、育児に対してリフレッシュできることが予想される。それにより、ゆとりや張りができ、生活満足度の向上につながると考えられる。一時保育の利用については、簡便性を求める母親とのミスマッチがあり、利用している人は少数である。多くの人からのサポートが期待できない今日、家庭外の育児支援は子育てをしやすい環境、楽しいと思える育児環境作りのためにも重要な育児支援の1つであり、利用しやすいものである必要がある。

また、「育児について相談できる場所がほしい」とも回答されていたこと、〈育児について心配なことがある〉と70%以上の母親が答えていたことから、相談できる人も限られている母親にとって相談できる場所が存在することは、育児不安や母親の孤立化を防ぐものであると考えられる。さらに、母親からは「常設でいつでも相談のできる場所がほしい」ということであった。母親が利用しやすいサービスを考える場合には、時間を考慮する必要があると考えられ、いつでもすぐ、身近にあることがキーワードであると考えられる。

また、公的機関へ相談にいき、母親がかえって不安に陥るなどサポート側の対応の悪さを指摘する人もいたことから、提供するサービス内容とともに支援する側の質や支援側の連携も問われてくることが予想される。子育て支援においては、保健師や保育士が多く活動しているが、子どもの発達をみながら、母親の心のフォローもできる心理士をおくことにより、母親とサービス側の関係をよりよく保ち、よりスムーズで母親の満足するサービスが提供できるのではないと思われる。また、保健師や保育士という他の専門職と心理士がコンサルテーションやリエゾンを行いながら育児支援活動することにより、育児不安や児童虐待に対し予防的働きができるのではないかと考えられる。

5) 母親の生活満足度サポートモデル図の検討

本研究において作成したモデル図は、母親の生活満足度サポートモデルである。相関については、表5、図6で示したとおりである。各項目間の相関が1%から10%の水準でみられており、母親の生活満足度のサポートモデルとして適切に対応していると考えられる（図7）。しかし、対象者が少数であることから、今後の課題として数量的分析に耐えうる対象者数での更なる分析が必要とされることは、いうまでもない。

先行研究の多くは、育児不安という育児の否定的側面について調査し、その結果、母親に対し支援しなければという指摘が多かった。本研究においても、育児支援を行う必要性があることは先に述べた。しかし、本研究の対象者は、生活に対し負担感だけでなく充実感も感じていることから、今後発展する育児支援とは、育児に否定的感情を持つ母親に対して行う育児支援だけではなく、育児を肯定的に考える母親に対してもさらなる意欲と活動を促すための育児支援を考えることの必要性も今回の研究により感じた。

V 今後の課題

今後の課題としては、まず、質問紙の信頼性と妥当性についてである。今回は、対象者の少なさから数量的分析には限界があったが、今後は対象者を増やし、量的分析を行い、質問紙と妥当性と信頼性を検討していく必要がある。

本研究の中では、経済的問題が随所にみられた。今回の調査では、経済的問題は組み込んでいなかったため、生活満足度との関係性を確かめることはできなかったが、経済的な余裕のなさは母親の精神安定上よいとは言えず、生活満足度だけでなく育児不安などにも影響があると考えられる。モデル図の中にも入るべき問題であると考えられ、今後の研究において検討していきたい。

引用文献

- 芳賀 道 2001 母親の育児ストレスに対する父親のソーシャル・サポートの緩衝効果について 大学研究年報 30 p211-218
- James S. House 1981 Work Stress and Social Support, Addison-Wesley, Reading, MA
- 蒲原基道 2001 これからの総合的な子育て支援について考える 現代のエスプリ 408 p93-100
- 川井尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・安藤朗子 2000 子ども総研式・育児支援質問紙（ミレニアム版）の手引きの作成 日本総合愛育研究所紀要 37 p159-180
- 柏木恵子・若松 素子 1994 『親になる』ことによる人格発達：生涯発達の視点から親を研究する試み 発達心理学研究 5 p72-83
- 加藤春子 2002 母親の育児不安について 人間福祉研究 5 p93-107
- 加藤邦子 1998 幼児期の子どもをもつ母親の生活満足度を規定する要因 - 育児支援とのかかわりを中心に - 家庭教育研究所 20 p61-81
- 小塚千絵・大平英樹 1999 日本心理学会第63回発表論文集 p865
- 牧野カツ子 1982 乳幼児をもつ母親の生活と＜育児不安＞ 家庭教育研究所紀要 3 p34-56
- 永久ひさ子 1995 専業主婦における子どもの位置と生活感情 母子研究 16 p50-57
- 津田千鶴・菊地武烈 2000 育児期の有職女性の生活満足度に関連する要因の検討 日本発達心理学会第11回大会発表論文集 p228
- 吉田弘道・山中龍宏・巷野悟郎・太田百合子・中村孝・山口規容子・牛島廣治 1999 育児不安のスクリーニング尺度に関する研究 小児保健研究 58 p697-704